

# From 'Study' of History of Philosophy to Philosophical Investigation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shibata, Masayoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/44867">http://hdl.handle.net/2297/44867</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 哲学史の「お勉強」から哲学研究へ

平成 28 年 2 月 21 日

柴田正良

金沢大学副学長（教育担当理事）

### 1. 何だって真似から始まる

もう定年退職の年齢ほどになったせいも、前ほどはこだわらなくなったが、学部を卒業する頃から、日本の哲学は西洋哲学の「猿まね」でしかなく、やっていることは哲学史のおさらいばかりだという思いが強く、いろいろな機会にかなり「熱く」それを非難したことがある。

まあ、考えてみれば、人間と類人猿の違いは、人間の場合、先人が得た知識や技術を次世代に伝えるおかげで子孫はその到達点から出発することができる、つまり、すべてを一から学び直す必要がない、というところにあるのは本当だろう。すると、人類の進歩は知を蓄積するだけでなく、それを模倣することができるからこそ可能になった、と言わざるをえない。ならば、他人、とくに先人の知恵や知識を真似することは推奨されこそすれ、非難されるべきことではない、ということになるだろう。事実、ユークリッド幾何学の定理の証明を改めて一々考えださなければならぬとしたら、人類はいつまでたっても、アインシュタインの物理学に到達することはなかったであろう。

だから、真似ることは人間の偉大な能力だ。「天才は模倣から始まる」というのも、大いなる真実であろう。しかし、そうは言っても、もっと大事なものは模倣をバネとした創造である。創造がなければ、人類は同じ所を堂々めぐりするだけで、前進することがなかったであろう。模倣は、新しい創造のためにこそ重要なのだと思う。

### 2. ちょっとだけ自分の若い頃を

高校から大学へ進学する際は、未熟とはいえ高校時代の「思想」のせいで、マルクス主義の前提となる哲学、つまり初期マルクス主義やヘーゲル哲学を勉強しようと漠然と考えていた。そして実際、自分が千葉大学の哲学教室に入学した初めの頃は、それらの翻訳を勝手に読み漁っていた。もっとも、当初は大学の授業よりは、アパートで孤独に読んでいた吉本隆明や埴谷雄高などの影響の方が強かったかもしれない。ともかく、ヘーゲルは難しかった。当時の白田貴郎先生が授業で読んでいた『法哲学』の原書はまだしも、翻訳であるのに『大論理学』は全くちんぷんかんぷんであって、いまだによく理解できない。それを小脇に抱えて山手線に乗るのは、自分では「格好」いいと思っていたけれども、恥ずかしながら、その頃の女子大生が通学する際アクセサリにしていたサルトルの『存在と無』と選ぶところはなかったと思う。ヘーゲルには大変申し訳ないが、『大論理学』は自分にとってまさに時間の無駄であった。その頃から、分からないものを無闇に有り難がる

のは止めようと思うようになった。なにしろ、何度読んでも分からないのは、「疲れる」のだ。

結局、大学入学時の自分の思想傾向を打破できたのは、当時の中村秀吉先生によるウィトゲンシュタインの演習のおかげである。実は中村先生の前任校は、ここ、金沢大学（法文学部）であり、私は奇しくも、先生の跡を遡って奉職したことになる。それはともかく、私は、ここで初めて、「哲学議論の面白さ」を体験することができた。とくに演習で用いられていたウィトゲンシュタインの『哲学探究』と『青色本・茶色本』からは、既存の発想や通説を「破壊する」とはどういうことか、を学んだように思う。そこでは、デカルトやカントの解説などまったく出てこない。日常の事実や言語使用を、哲学史の知識から離れて、徹底的に議論する。言語ゲームという、今では有名になった舞台の上で、学説を覚えるのではなく、自分なりに議論することが求められる。過去の哲学者は、破壊の対象となるときのみに呼びだされる。

そのような「哲学体験」を生身の哲学者として体験させてくれたのは、当時、東大から集中講義に来られていた大森荘蔵先生である。大森先生の講義については、今さら私が語るまでもないが、まさに、創造行為としての哲学を、「台所の出来事」をテーマにとことんやり尽くすものであった（その衣鉢は、いまの東大の野矢茂樹さんによってよく継がれていると思う。長年のよしみで「さん」づけで許してもらおうけど）。おかげで、大学の教壇に立ち始めた頃、私は、大森先生の『流れとよどみ』（産業図書、1981）を何度もテキストに使わせてもらうことになった。

そういうわけで、卒業論文のテーマを中村先生に報告した際、「君はてっきり、ウィトゲンシュタインを選ぶものと思っていたよ」と言われたのを今でも覚えている。実は、私の卒論のテーマはなんと、今までほとんど読んだこともない西田幾多郎の哲学であった。先生は「ちょっと意外」という顔をされた。私が西田哲学をテーマに選んだ理由は、まさしく、日本のこれまでの有名な（西洋哲学系の）哲学者の中で、唯一、西田だけが、「独創的な思考を展開している」という評判が高かったからである。私は、西田の主要著作もあまり知らないままに、「オリジナリティ」という評判だけに憧れて、卒論作成を開始することになった。

しかし、大変残念なことに、日本のオリジナルな哲学を知りたいという私の望みは、ほとんど満たされなかった。これは、私の当時の経験不足も大いに原因であろうが、私には西田哲学が新カント派とベルグソンの「雑炊」以上のものには見えなかった。彼の著作を読み進んでいくうち、何よりも私を苛立たせたのは、彼のほとんどの論文に頻出する

「…ねばならない」という文句である。この言い回しは、ある主張と別の主張をつなぐ際に用いられるのだが、その根拠が示されない。つまりこれは、ロジックではなく、読者を説得するための安価なレトリックにすぎない、と私には思われた。いま読み返せば少しは評価が違って来るかもしれない。いま思い返す限りでは、アリストテレスに依拠した「場所の論理」だけは、西洋型思考の根本にある「実体＝個体」の枠組みを超えるオリジ

ナルな発想となりえたかもしれない、という予感はある。

後日談ではあるが、この卒論は、その後、名古屋大学大学院の口述試験の際に、試験官の某教授から、「すれ違い論文だな」とバッサリ切られてしまった。まあ、卒論ごときで恨みがましく言うつもりはないが、その先生は京都大学出身だったので、オリジナリティへの期待が裏切られたことを嘆く論調が、気に入らなかったのかもしれない。しかし、確かにその先生が言われたように、書く本人が書こうとする対象に失望しているような状態では、論文を書く方も、それを読まされる方も、ともに不幸であるのは間違いない。西田にはまことに悪いが、私も多くの「苦痛」を耐えたのだ。これが、日本の哲学にオリジナリティを求めた私の大学時代の結末である。

## 2. 翻訳と代理戦争

大学院とオーバードクター時代を過ごした名古屋で、私は、哲学の議論に関して最も自由で最も刺激的な時間に恵まれた。それは、ほぼ同年代の哲学者たちとの、「読書会」という形式を通じた「白熱の議論」である。ここで私は、過去の有名な哲学者に「忠誠を誓い」、その哲学に「入信する」ことから、完全に解放された。

その「読書会」のメンバーは、長い間にいろいろと入れ替わりはしたが、年かさの順に並べると、現在、南山大学教授の服部裕幸さん、同じく横山輝雄さん、名古屋大学教授の戸田山和久さん、首都大学東京から慶応大学へと今春移られる予定の金子善彦さんなどである（ここでも「さん」づけにするが、みんな、学会の会長など、いまや偉い人たちばかりだなあ）。ここで読んだのは、D. デネットやM. ダメットやJ. フォーダーなど、主に、分析系の現代哲学であったが、われわれの誰一人として、彼らの誰かに弟子入りしようなどというような者はいなかった。「彼らと自分との違いは何か、その違いにこそ自分が哲学する意味がある」、とわれわれは、表立って口に出しはしなかったが、みなそれを当然のこととしていたように思う。デカルトやカントの研究も良いが、彼らの哲学を完全に理解することだけを理想とし、彼らと自分の距離を縮めるために研究するのはバカげている。それは、距離がゼロになったら、自分の存在理由が無くなるような行為だからだ。というのも、彼らの主張にあなたが心から同意し、あなたの哲学は本当にそれ以上ではないとしたら、あなたより遙かに上手にその主張を行った大人たちがすでに存在している以上、あなたがそれをもう一度、しかも大人たちより拙劣な仕方で行う必要などまったくないからである。

その当時、私がどうしても腑に落ちなかったもう一つのことでもまた、実は思想や表現のオリジナリティと関わりがある。それは翻訳のあり方である。現在も事情はそう変わらないかもしれないが、大学院を出て大学に職を得るまでの間、われわれオーバードクターは、自分の名前を世間や他大学の先生にできるだけ覚えてもらうために、よく哲学書や哲学論文の翻訳を買って出る（あるいは、偉い先生を通して出版社などからお声がかかる）。私も、ご多分に漏れず、必ず幾つか誤訳するというリスクがあるにもかかわらず、けっこう

多くの翻訳に手を染めてしまった（自分のキャリアを通して見れば、やり過ぎである）。

私が哲学の翻訳で一番不満に思っていたことは、その分かりづらさである。とにかく読んでも分からない。われわれが分からないぐらいだから、哲学用語に不慣れな一般読者には「睡魔を誘う呪文」のようなものであろう。ところが、哲学書翻訳の理想は、分かりづらさなぞ何のその、原文の構文をできるだけそのままにして、辞書的訳語をそれに当てはめていく、という「正確さ」にある。結果として出来上がる訳文は、英語やドイツ語が分かる読者には内容の理解の助けにはなるかもしれないが、それ単独で理解しようとする読者には「お経」よりも始末が悪い。しかし、その「分かりづらさ」を、「内容の難解さ」と取り違え、それをさらに「思想の深遠さ」と勘違いする向きが、哲学の教員の間にもいかに多かったことか。もちろん、古典の翻訳にも例外はあるし、その当時でも木田元先生らによるメルロ・ポンティの翻訳などは、日本語で理解できる水準を達成していたと思う。

哲学書の翻訳に関するこの「病氣」は、哲学表現のオリジナリティに対する尊敬などではなく、西洋哲学に対する長年の拝跪から来るものだと私には思われた。要するに、日本を代表する大学で教えるこれまでの多くの偉い哲学教授たちは、「難解な文章を読める」という意味で語学ができる人たちであって、自らの責任で独自の哲学を展開しようとは思っていない人たちなのだ。それは彼らの翻訳から分かる。というのも、そもそも翻訳は一種の創造行為であって、危険を冒すことなしに語学の知識だけでできる、別の容器への単なる移し替えではない、と思うからだ。この点では、南山大学から東北大学に移られた野家啓一先生に依頼された『知覚と発見』（N. R. ハンソン、紀伊國屋書店、1982）の下訳の作成は、自分の思う翻訳を練習する良い機会となった。しかし、何より、人生の大恩人である南山大学の立松弘孝先生には、「翻訳の苦悩」を通して、翻訳の奥の深さを教えて頂いた。立松先生のご自宅に当時、毎週集まり、フッサールの『形式論理学と超越論的論理学』の訳文を先生にチェックして頂く際、私は不遜にも、この哲学翻訳の文字通りの大家に、自前の「翻訳理論」をぶつけたものである。先生はたいていは静かに笑って、少し寂しい顔をされていた（ちなみに、この翻訳は、みすず書房からのシリーズ本として世に出るはずであったが、ついに日の目を見ることはなかった）。その後、私が自分の気の済むように翻訳をすることができたのは、同じく立松先生から依頼された『現象学運動』（H. シュピーゲルバーク、世界書院、2000）と、当時の都立大におられた丹治信治先生の紹介による『意味の全体論』（J. フォーダー、産業図書、1997）である。しかし、若い人たちに言っておきたいが、翻訳は、よほどの理由や義理がなければ一回に留めておくのが賢明である。というのも、時間と労力の割に今では評価が低く、しかも必ずどこかで誤訳をするからである。

日本哲学のオリジナリティに関して、私は、さらに暫くして、ある学会で衝撃的な出来事を目撃した。それは私にはあまりに「無残」なものに思われたので、自分の論文の中に

に「注」の形で書き留めざるをえなかった<sup>1</sup>。それはあらまし、こういうことである。

設立して間もない現象学会で、ある若手の研究者がハイデガーに関して発表を行った。終わってからの質疑応答で、京都大学の某教授が質問をした。「これについて、ハイデガー自身はどう考えていると思うか?」。発表者が答えを言う前に、その教授は得意げにこう付け加えた。「私は、ハイデガー本人からその答えを聞いて知っている」。発表者がうろたえたのはもちろんである。会場が嫌な雰囲気にもまれたと感じたのは、私だけだったろうか。(もっとも、京都大学の名誉のために付け加えておけば、現在、私が知っているその先生たちは、水谷雅彦さん、出口康夫さん、伊勢田哲治さんなど、そんな権威主義とは無縁の人たちばかりである)。

これは、実にくだらない質問だと、いまでもわたしは思っている。もちろん、ハイデガーがどう考えているのかが重要なポイントになる議論もあるかもしれない。しかし、件の教授がひけらかしたかったのは、「自分がどれくらいハイデガーと親しいか」ということである。場合によっては、ハイデガー自身が自分の哲学を誤解し、整合性のない回答をしたかもしれない、などということは、この教授の頭にはこれっぽっちも浮かばなかったに違いない。これは、日本の哲学が基本的に西洋哲学からの「輸入品」であり、しかもそれを「哲学史」の一つとして有り難がり、極端な場合にはそれに「入信する」、という明治以来の構造から抜け出せないでいることの結果である。前記の「注」にも書いたが、いまだに、学生の研究テーマを尋ねるときに、先生は、「何をやっているの?」とは聞かずに、「誰をやっているの?」と聞くのが通例である。あたかも、哲学史の「おさらい」が哲学の研究であるかのように(しかも呆れたことに、この「誰を?」という質問は、ごく最近の中部哲学会のシンポジウムでも、またしても「偉い先生」から堂々と繰り返されたのである。はあ)。

哲学史偏重、西洋哲学者拝跪の風潮は、日本における哲学論争の意義もねじ曲げてしまう。例えば、志向性や意識の多重実現性に関してわが国の哲学者同士で論争が始まったとしよう。しかし、そのような論争のほとんどが、そもそも海の向こうで論争し合っている哲学者同士の争いから出発しているので、わが国の論争は、例えばそれに関する D. デネットと J. R. サールの「代理戦争」にしかならない場合が多い。日本の哲学者のオリジナルな論点相互がぶつかり合う、ということが基本的に存在しないのだ。したがって、そうした論争の旗色は、海の向こうの情勢によって決まることになる。これも実に情けない話である。しかも、この論争がある西洋哲学者、例えばハイデガーの解釈をめぐるものだったとしたら、先ほどの「私はその答えを本人から聞いて知っている」という発言がいかに強大な力を論争当事者に対して揮うかは、容易に想像されることであろう。

実は、そのような代理戦争と見られかねない論争を、私は、ここ 20 数年にわたって大阪市立大の美濃正さん、現在は慶応大学の柏端達也さんと繰り広げてきた。ことの発端

---

<sup>1</sup> 「ある論争のかたち——黒田-滝浦論争に寄せて」、『ウイトゲンシュタイン読本』法政大学出版局、飯田隆編、II-2 pp. 120-130. 1995 年 10 月

は、1994年に北海道大学で開催された日本科学哲学会のワークショップ「デイヴィドソンの行為論をめぐる」である。心の哲学を主な舞台として非還元的物理主義か還元的物理主義かを争ったこの論争は、今年、2016年にも、あの短編小説のタイトルよろしく

「After 20 Years」と題して京都で再演(?)が予定されている。私が懸念するのは、このわれわれの論争すらも、当事者たちの意識とはかけ離れたところで、D. デイヴィドソン、J. キム、あるいはD. ルイスらの代理戦争と見なされてしまうのではないかと、いうことである。もちろん、本筋は、われわれがどれほど独自の論点を出すことができたのか、ということである。したがって、われわれに対する評価の良し悪しはどうあれ、この論争自体の帰趨が、海の向こうの情勢によって占われるのはナンセンスである。われわれはいずれも、デイヴィドソンやキムやルイスの代弁者として議論をしたのではなく、最後は彼らの土台を打ち壊して、自らの議論を貫徹しようとしたのであるから。つまり、「代理戦争」という構図もまた、わが国の哲学にオリジナリティが欠けていることの悲しい証左なのである。

### 3. 未来の哲学者に向けて

若い人たちにいろいろと伝えたいことはあるけれども、ここではオリジナリティのことだけに話を絞ろう。ただ、その前に一言。哲学が自分にとって何の役に立とうと、最後は楽しいから哲学をやるのであろうから、ぜひ哲学の面白さを十分に味わってほしいと思う。本人が面白がっていない話は、他人が聞いて面白いはずがない。

さて、あなたが学生だとしたら、まずは自分が興味をもっている発想や議論にとことん付き合ってみてほしい。それがたまたま、ある有名な哲学者の一連の著作や論文であってもかまわない。できれば、「科学は本当に実在を捉えているのか?」とか、「他人に心は本当にあるのか?」とか、「安楽死はなぜ悪いのか?」といった具体的なテーマを考えてもらいたいが、そうではなく、デカルトやカントの哲学といったものでも取っかかりとしてはよいと思う。私が言いたいのは、その先である。大事にしてほしいのは、論者たちの議論を知識として覚えるのではなく、論者たちと自分の考えはどこが違うのかを常に明確にしておくことである。彼らと自分との違い、彼らに賛成できない点、それこそがあなたの個性であり、あなたの考えの源であり、あなたの存在理由なのだ。大切なのは、彼らと一体になることではない。彼らと距離を保つことなのである。

次に、もしあなたが研究者の道を歩み始めているなら、私が言いたいのは、次の一言である。哲学史と哲学は違う。だから、あなたが「歴史研究者」として哲学史を研究したいのではなく、哲学を研究したいのならば、さっさと哲学史の「お勉強」を忘れて、自分なりの哲学のテーマを研究すべきである。こんな乱暴な言い方をするのは、日本哲学会などで私が務めた論文査読者としての多少長い経験からである。多分いまも当時と変わらずに、若手研究者の論文の多くは、「〇〇における△△の問題」というようなタイトルをしているだろう。この「〇〇」にはもちろん、過去の有名な哲学者の名前が入

る。われわれの間で悪名の高い「おける論文」という代物だが、学生ならいざ知らず、研究者にさえも、こういう、「自分はここまで〇〇を分かりました」という一種の自己満足的な論文を書く手合いが多いのには、その当時、大いに辟易させられた。これは、自分が「入信」した哲学者に関する微に入り細をうがった「局所的」な解釈であるのが普通で、言わば〇〇に対するラブレターのようなものである。私はよく査読の際に、「あなたの才能と時間を、このようなつまらない解釈問題に費やすのはもったいないので、〇〇が正しいという前提を捨てて、〇〇が考えた問題に自分なりに取り組んでほしい」というようなコメントを付した。しかし、恐らく今後もしばらくの間は、「おける論文」が日本の研究者の定番であるに違いない。

誤解を招かないように言っておけば、私はなにも哲学史の研究をするな、と言っているのではない（さっきは乱暴にも、そのように聞こえることを言ったが）。昔も今も、そして今後も、われわれが過去の哲学の研究から学ぶことは多いし、多くの素材ばかりか、刺激的なヒントや発想の種をそこから得ることができるだろう。しかし、問題は、哲学の研究者である以上、あなたに求められる最終成果は、プラトンやデカルトほどに「燦然と輝く業績」（あまりに過大な要求！）でなくとも、少なくとも「あなたが自分の責任で創ったユニークな業績」だという点である。とくに、学生の授業料や国の税金でメシを食っている哲学の教員に関しては、客観的に見て「当人の趣味の感想文」でしかないような論文は、職業倫理上、許されないということである。そのような論文は大学の同僚には理解も同情もされず、結局は、哲学のポストは失われるだろう。もっとも、これは本質的には「結果」というより「志」の問題であるから、未来の哲学者であるあなた方も、少しは安心してもらっていいと思う。いや、「安心」というような受け身の態度ではなく、「自分こそが未来のプラトンやデカルトになるんだ」とぜひ思っしてほしい。そのためには、何よりも自分のオリジナリティを、どんな些細な点でもいいから、大切に育てほしいと思う。

定年間近になってきて、諦めの方が多くなってはきたが、諦めるべきは自分のことであって、日本の未来の哲学に関しては諦めてはいけないのだ、と改めて思った次第である。

では、みなさん、good luck.